双青戦は日本である

TOKYO vs KYOTO

東の東京大学。西の京都大学。

その起源はともに、幕末の学問所や研究所に遡る。1877年、まず日本で最初の大学として東京大学が誕生。開国直後の混沌とした社会において、欧米に追いつき、追い越し、日本の改革をけん引するための人材を育成・輩出することがその目的であり、そうした動きがこの国の近代化の礎を築いてきたことは明白だ。

京都大学はこの国二番目の大学として1897年に設立された。日本の理化学研究発祥の場といわれる舎密局（せいみきょく）をルーツに持ち、ノーベル賞受賞者を多数輩出。科学分野を中心に、この国の発展に大きく寄与してきたことに疑いの余地は無い。

日本を築いてきた双璧といえる東京大学と京都大学。学問・研究分野で互いに認め合い、長きにわたって切磋琢磨してきたわけだが、それはスポーツでも同じだ。1920年に開催された両大学のボート競技会では、英国の名門ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の対校戦で前者が「淡青」、後者が「濃青」をスクールカラーとしていたことに準え、くじ引きによって東京大学が淡青、京都大学が濃青のボートを使用。それがそのまま両大学のスクールカラーとして定着したという逸話も存在する。

そして2009年、各競技で独自に定期戦を行ってきた両校は、そのライバルリーをさらに高めるため、総合対校戦とし、その4年後に「双青戦」という総称を導入した。東京大学は総合3連覇中で、59回目の定期戦となるアメリカンフットボールでは初の3連勝を目指して気力十分。甲子園ボウル優勝6度を誇る京都大学も、そのプライドにかけて負けられない。奇しくも、東京大学に今季就任した森清之ヘッドコーチは、選手やコーチとして日本一を経験した京都大学のOBでもある。

日本をけん引してきた二つの「青」。その両雄が必勝を期して今、ぶつかり合う。